綴葉（ていよう）

'21 12

No.403

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

橋本治著『人工島戦記 あるいは、ふしぎとぼくらはなにをしたらよいかのこども百科』

ボエル・ヴェスティン著、畑中麻紀・森下圭子訳『トーベ・ヤンソン 人生、芸術、言葉』

特集／こういう本もありだよね

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階
Tel：771-6211 ／ E-mail：teiyo@s-coop.net
綴葉HP：http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

京大生協 綴葉編集委員会

やっと橋本治の魅力が分かった。

人工島戦記
あるいは、ふしぎとぼくらはなにをしたらよいかのこども百科

橋本治著
ホーム社

――橋本治というのは結局どこまで行っても、普通の感覚を忘れなかった人なんだと思う。え、そんなのふつうのことじゃないかって？　ところがそうじゃないんだ。人は行動を起こした時、そして何かに詳しくなった時、それに興味ない人の気持ちを忘れてしまうんだ。しかし橋本治は忘れなかった、没頭すると見えなくなってしまう、人々の視線をいつも忘れなかった。

思えば彼のデビュー作『桃尻娘』は、当時の若者たちの心情を若者言葉で書いた作品だった。続く『桃尻語訳　枕草子』や『桃尻語訳　百人一首』は、古典という権威を纏ったがゆえに敷居が高い作品を若者言葉に翻訳したものだった。彼はいつも時代の言葉に敏感で、肌感覚にある言葉を使っていた。だからちょっと本に慣れた人が今読むと「砕けすぎじゃない？」とか「ちょっと古くない？」とか思うだろう。でも、その崩し方こそが大事なんだ。その魅力に『人工島戦記』を読んでやっと気づいた。もう彼はこの世にいないのだけれど。

政治の言葉を日常にすることの難しさ

本書の主人公、大学生のテツオはある日テレビで自分の街に人工島建設計画があることを知る。そしてすぐに「こんなのいらねーよなー」と思う。友人と話してやっぱり「いらねーよなー」と思う。図書館で調べたら人工島建設計画は杜撰で穴だらけだった。ひょんなことから幾人かの仲間も増えて、せっかくだからこの問題を人々に語り掛けたいと思う。しかし周りは無関心だ。人工島に無関心なのではない、声を上げることに無関心なのだ。「オレ達がいくら〝反対だ〟と言っとっても、結局は〝作る〟ってことを決めたんだから、作っちゃうんじゃないの。」「それだけなんだから、ムダな議論はムダなんじゃないの？」

テツオは戦慄する。怒りたくなるが、理解もしてしまう。テツオの母は市民活動家だった。環境問題や社会問題の不正に声をあげていた。そんな活動をテツオはずっと冷ややかな目で見ていた。……分かるんだけど違うんだよな。かつての母を見る目線は、自分をみる視線と重なった。届く言葉が欲しい、興味のない人にも、関心のない人にも届く言葉が。テツオは「皆さん」という言葉を「みんなはさー」という言葉に変えて、自分の言葉で政治を語ろうとする。

――ああ、ここにあるのは今の世も通じる、大学生の悩みだなと思う。行動を起こしたり、知識を身に付けたりすると、ちょっと先生みたいに喋るのが当たり前だと思ってしまう。特に政治なんてそうで、興味ない人に対して、その態度を責めたくなる。テツオは活動家になりたくない、でも無関心にもなりたくない。その狭間の中で重要なのは、知識を自分の言葉に翻訳することだと気付いていく。橋本治がなんであんなに日常語にこだわったのか……軽い言葉の奥にある、深い魅力が分かった気がした。

（一四〇四頁　税込一〇七八〇円　9月刊）

（きもの）

トーベ・ヤンソン――ただ、自由であること。

トーベ・ヤンソン 人生、芸術、言葉
ボエル・ヴェスティン著
畑中麻紀・森下圭子訳
フィルムアート社

最近、ムーミンの作者として名を馳せるトーベ・ヤンソンに関する映画、著作が多くでている。二〇〇一年に亡くなってから、二〇年が経った現在、私たちは彼女から何を受け取ることができるだろうか。本書では、トーベの誕生から晩年まで、作品に関することだけでなく、彼女がどのような家に住み、どこに誰と出かけ、誰に宛てて手紙を書き、どういったビジネスをし、何を想像していたのか事細かに記されている。評者は、このような伝記ものに対して、そんな私的なところまで勝手にふみこむのは悪趣味だなんて思ってしまう。しかし、トーベは自身の送った手紙をコピーに取るまでして、多くの情報を残し、友人でもある本書の著者に託したそうだ。トーベは後世に対しても自身の立場に責任をもっていたといえるだろう。

本書の見どころは書ききれないが、やはり若い時期から晩年までのトーベの作品や写真を多く見ることができる点は、ワクワクしてしまう。カラーページに載せられた作品は、ムーミン以外にも自画像やフレスコ画など、その色使いを含めうっとりする。

本著の版元であるフィルムアート社からは、今年三月にトーベ・ヤンソン著、久山葉子訳『**メッセージ　トーベ・ヤンソン自選短編集**』が刊行された。トーベの後期作品を集めたこの短編集は、ムーミン作者としての印象が強すぎる読者にとっては、新しい彼女の像が立ち現れるだろう。トーベ・ヤンソンはフィンランドに住むスウェーデン語話者であったため、フィンランド語が混ざったスウェーデン語（畑中麻紀は、スウェーデン人に「ムーミンのスウェーデン語」と教わったそうだ。）で書く。初邦訳のものも多いこの短編集は、そうした知識をもって読むと訳者に対しても尊敬と感謝の念を抱かざるをえない。まだまだ知らないトーベの世界に、私たちが足を踏み入れることができるようになったのだから。

トーベの人生や他の多くの絵画やイラスト、著作を辿ると明らかなように、彼女はムーミンの世界にだけ生きていたのではない。彼女は、働くこと、自立すること、愛することを大事にしていた。ムーミンのようなおとぎ話をつくる彼女が、実は堅実に地に足をつけお金を稼ぐ方法を思い巡らしていたのは意外かもしれない。しかし、私たちは「今」を生き、何かを変えるためには「今」を見なければならない。トーベは、ビジネスにムーミンがのまれないように注視し、しかし稼ぐこともしっかり計算していた。また、彼女は女性であることによって従属的な立場になることを嫌い、男たちによって戦争が起こることを怒った。家族でも、友人でも、パートナーでも、とにかく愛する思いを伝えた。彼女はただ、自由であるのだ。

晩年まで四五年連れ添った彼女のパートナーであるトゥーリッキ。彼女の名前は、フィンランド語のトゥーリ（Tuuli）からきている。その日本語の意は、風。本書には、トーベがそれを嬉しそうに話していたとある。

（トントゥ）

（六五六頁　税込四一八〇円　10月刊）

毎日読みたい 365日の広告コピー

WRITES PUBLISHING編　ライツ社

「花火の花言葉ってなんだろなあと言ったら、『口実』と君が小さくつぶやいた。」

SNSでこの一行に出会った時、存在しない淡い夏の記憶が、私の頭を過った。

著名な誰かによって、何頁にもわたり書き綴られた高貴な文章よりも、たった一行か二行で想像を掻き立てるような、詠み人知らずの言葉が大好きだ。本書は、「言葉」に惚れた者たちの心をくすぐるような広告コピーを集めた内容になっている。

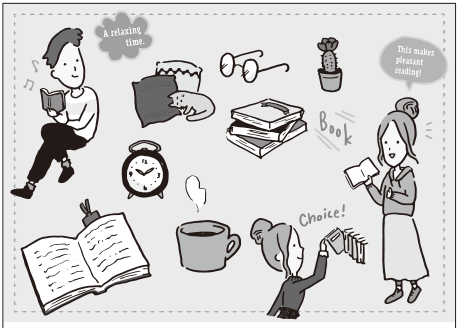
商品の購入やサービスの利用への意欲を煽るものや、社会課題解決のための意識向上を図ろうとするものなど、目的は様々であるが、一目で脳裏に焼き付くように生み出された数行の言葉たちが、カレンダーのように綴られていて、次はどんなコピーが来るだろうと、ドキドキしながら捲っていける。

「人は、人の傘になれる」

このコピーは愛媛県のあるポスターに載っている。そのポスターとは、自殺予防啓発に関する広告であった。「自殺を止めましょう」というような正しいメッセージを何百と伝えることも大事ではあるが、たった一行だからこそ印象に残り、人々の行動を変えさせるような魔力が、この広告コピーには感じられる。

事業プレゼンやプロポーズ、誰かが悩める時など、自分から出た言葉が人生を変えるかもしれないという局面に人は何度も直面し、その度に一人のコピーライターにならざるを得なくなるのだと思う。だからこそ、少しでも素敵な言葉を自分の中に蓄積させておくことが、きっと必要なのだろう。　（**ましゅ**）

（392頁　税込2030円）



特集

こういう本もありだよね

「『**綴葉**』っぽい本」って聞いて、あなたはどんな本を思い浮かべますか？　編集委員という「中の人」からすると、哲学とか文学とか、いわゆる「お堅い感じ」な本かなあ、と思う次第です。もちろん、それらを楽しみにして今回も手に取ってくれたのかもしれませんが、あらびっくり！　今回は「っぽくない」本が目白押しです！　たまにはこういう本もアリだよね、って本を集めました。あなたにとっても、私にとっても、新たなジャンルとの出会いになればと思います。いつの日か今回取り上げたような本たちも、『**綴葉**』の顔になる日が来るのかも……！

（**出席点**）

Higuchi Yuko Artworks ヒグチユウコ作品集

ヒグチユウコ　グラフィック社

お恥ずかしながら、今まで私は作品集というものを買ったことがなかった。「小説だったら買わないと物語がわからないけど、絵は他でも見られるし」とか言って、絵は展覧会や作家のサイトなどで見るに留めていたのだ。

ところが私は間違っていた。一枚、また一枚とページをめくるにつれて、不思議とお伽噺の世界に引き込まれていく。文字で書かれる「おはなし」はないはずなのに、確かに頭の中に物語世界が広がっていく感覚がある。

この不思議な引力はなんだ。恐らく、絵一つ一つが持つ絶妙な危うさであろう。可愛さと不気味さ、明るさと儚さが、ギリギリのバランスで保たれている。鮮やかなピンク。女の子やネコ、貝殻にキノコにふわっとかけられたリボン。全て「カワイイ」ものであるはずなのに、モチーフのアンバランスな組み合わせと、それらを描く緻密な線の折り重なりが、そこに「物語性」を与えている。

「子守り」という絵では椅子に座ったネコがナマズの赤ちゃんを抱いているのだが、その腕は人間のお母さんのように逞しい。顔は毛並み一本一本、本物のネコそっくりに描かれていて、目は鋭くこちらを見つめている。

絵の隅々までじっくり味わっていると、優しく穏やかに、遥か遠くの世界に連れて行かれるようで、布団の中で童話を読み聞かせてもらっている子供のような気持ちになる。

本棚のよく見える位置に置き、寝る前に取り出してぱらぱらと見返すようになった。自分の部屋に、大好きな世界への入り口が出現する。これまで手に取らずにいたけれど、「こういう本もあり」ですね。気づくことができて良かったです。　（**茫漠**）

（160 頁　税込 2530 円）

浜辺美波写真集 20

浜辺美波

峠雄三撮影　講談社

諸氏に問おう。芸能人の写真集を買ったことがあるだろうか。「そんなの低俗だ」との声が聞こえてきそうだ。学徒諸氏は日夜研究に明け暮れ、そのような「低俗な」本は読む暇もないのかもしれない。小生もその一員であったことを告白しよう。京都大学という学府の末席を汚している小生は、そのような写真集は元来一度も買ったことがなかった。しかし本特集によって、女優の写真集との接点を持つ僥倖に預かったのである。その写真集とは『浜辺美波写真集 20』だ。浜辺美波氏の存在が人口に膾炙して久しいが、本書はその氏の待望の写真集である。舞台は日本、奄美大島。表題にもあるとおり、氏の二〇歳の素顔を捉えんとするのが、本書のコンセプトである。

これまで小生は「画面の向こうの彼女」のことしか知らなかった。しかしどうだろう。頁を捲るたび、浜辺氏の新たな一面に出会えるではないか。このような写真集に関しては門外漢であるが、僭越ながら小生なりの所感を述べさせていただこう。本書の見所は所謂「サービスショット」が無いところである。諸氏は残念に思うだろうか。しかし、豈に計らんや、それが浜辺氏の魅力をかえって引き出すことにつながっているのだ。読者に媚びるようなポーズや画角ではなく、氏の何気ない一瞬を切り取る構成に、小生は惹きつけられた次第である。

愚見では、本書は読者のための写真集ではなく、浜辺氏自身のための「アルバム」なのではないか――そう思った。それほど本書は浜辺氏に寄り添った一冊だ。長々と筆を進めてきたが、最後に一つだけ言わせていただきたい。浜辺美波しか勝たん。　（**出席点**）

（128 頁　税込 2970 円）

異世界食堂

犬塚惇平作　エナミカツミ絵
主婦の友社

ラノベは不遇である。え、ラノベ？　何で？『綴葉』のようなところでは取り上げられないのだ、「小説」なのに。人気あるのに。たとえばVR世界に閉じ込められたという設定なら「SF小説」に分類されたっていい。魔術が出てくるなら「ファンタジー小説」でもおかしくはない。なのに「ライトノベル」の名付けのままに「軽い」扱われよう、いやほとんど扱われていない。マンガだったら何回かは誌面に登場しているはずである。今回の特集で少し存在を認知してもらわないと、などと勝手に義務感を感じてしまった評者である。

閑話休題、ラノベにも流行りがある。異世界転生するなどが最近有名だが、「異世界もの」でも「こういうのもありだよね」、ということで本書を挙げてみたい。

オフィス街の傍らにある「洋食のねこや」は平日営業、土曜は特別営業。というのは土曜になると時空の歪みで異世界と扉が通じてしまい、その世界の住人が客として食事をしに訪れるのだ。異世界側の扉は週一でどこかに現れる。それを知っている者しか店にたどり着けない隠れ名店なのだ。出される品はメンチカツやハンバーグ、いわゆる普通の定食だが、異世界の住人がこれを食べる時の様子がいかにも美味しそうに描かれる。最近は街中の定食屋巡りや何気ない食事がテーマになった作品が人気だ。特別なグルメを追い求めなくとも「そうそう、こういうのがいいんだよ」、という気にさせてくれる。

マンガもかつては「読んだらバカになる」と蔑まれていた。ラノベも今後は文化的市民権を得ていくのかもしれない。下らないと思うものが案外面白かったりするかも。（**ねこ**）

（280頁　税込748円）

崩れゆく絆

チヌア・アチェベ著　粟飯原文子訳
光文社古典新訳文庫

400号企画を準備していた時のこと。既刊の『綴葉』を見返していたら驚いた。アフリカの文学の登場率が圧倒的に低いのだ。そもそも「アフリカ文学」とはいかなるものなのか……ここではアチェベの『崩れゆく絆』を紹介しよう。

ナイジェリア出身の作家による本作は、「アフリカ近代文学の原点」としばしば呼ばれてきた。その所以は第一に、五〇年代から六〇年代にかけてのアフリカ独立期に著されたこと、第二にアフリカの伝統と近代西欧の文明との衝突を主題とすることがあげられるだろう。この主題は、男性と女性、市と森、肌の色、階級、神の存在など無数の対立項が絡み合って、大きな幹となっている。

貧しい生まれのオコンクウォ。幼くして名声を望んだ彼は、成長してそれを恣にした。だが我が世の春も束の間、不慮の出来事により村から流刑にされる。不如意な生活を送る最中、故郷には白人宣教師が到来していた。数年後彼が帰郷した時、村の社会は大きく変動していた……「近代文学の原点」とは名にし負えど、意外にも粗筋は簡潔に要約される。

しかし本作の面白みは、内容よりも描写スタイルの変遷にある。オコンクウォの流刑前の章は、彼を中心人物に据え、イボ族の伝説や独特の言い回し、風俗描写も織り交ぜながら物語が進む。同じ話が繰り返されることだってある。他方、宣教師到来後は、聖書の言葉が急増し、彼以外の登場人物の描写も増える。物語の展開速度もかなり速いのである。

このスタイルの変化があるからこそ、小説最後の一文は大きな衝撃と共に私たちに迫る。本作が見せるもの、それは「アフリカ文学」という行為なのかもしれない。　（**リンダ**）

（361頁　税込1232円）

月刊新聞ダイジェスト
2021年11月号
新聞ダイジェスト社

普段『**綴葉**』で取り上げない「新聞」は、大学生とも縁遠い存在となりつつある。講義の課題やバイト、早期化し続ける就活に追われ、毎日分厚い新聞を読む時間などない学生は多い。読み比べなど論外だ。そんな忙しい学生に、「月刊新聞ダイジェスト」を勧めたい。

本誌は6大新聞の記事を毎月まとめてくれる。例えば2021年11月号では、9月1日から9月30日の記事がまとめられており、「注目のニュース」として、自民党総裁選で岸田文雄氏が勝利したことなどを取り上げている。総裁選の特集では、立候補者の主な政策や主張をコロナ対策、経済政策、外交・安保、党改革・森友問題の4つの点で分かりやすく整理した朝日新聞の記事や、決選投票で岸田氏が高市氏の票数を取り込んだことを分析した読売新聞の記事などが掲載された。あるニュースに関する記事を効率的に追うことができ、主義主張の異なる様々な新聞社が同じニュースの題材をどのように記事にしているのかもチェックできるのだ。

「注目のニュース」に選ばれなかった記事は、政治、経済、国際、社会のジャンルに分けて紹介される。社会欄は裁判、教育、文化など、小分類にさらに分けられるため、自身の研究テーマに近いところだけ読むこともできる。また「今月の社説読み比べ」では、あるニュースに対する各社の立場の違いを明確に知ることができる。

本誌を用い、「注目のニュース」と、関心のあるニュースだけでも毎月読んでみてほしい。自身の研究を専門外の人に紹介する時に適度な専門性の言葉と、研究と社会をつなぐ言葉が見つかるかもしれない。　　（**石透**）

（180頁　税込990円）

ビジネス書を捨てよ、街へ出よう
プロ営業師の仕事術
高山洋平著　総合法令出版

キャップにサングラス、ド派手なTシャツに短パンとくれば、髭はモジャモジャ――表紙を飾るこのいかにも怪しそうなおじさんこそ、この本の著者・高山洋平である。本書は、株式会社おくりバントの社長を務め、「プロ営業師」を自ら名乗る彼が、仕事や営業の極意をストーリー仕立てにしてまとめた一冊である。

物語は、成績不振に悩む営業マン・真部誠が、高山の元へ出向を命じられるところにはじまる。ところがこの高山という男、一向にオフィスへと現れない。仕方なく後をつけてみるに、喫茶店で『刃牙』を読んでは個室ビデオ、ファミレスのはしごという「サボりのフルコース」。しかし、そこには彼なりの仕事の流儀があった。本書はそんな「最強の営業マンになるための五大思想」から、「松屋理論」や「ルノアール理論」といった独自理論に裏打ちされた「円滑な社内コミュニケーション」の秘策まで、なかなかクセ強めの仕事術を徹底的に紐解いてゆく。

……と、ここまで読んで多くの方がお気づきのとおり、この「ビジネス書」に大して中身のようなものはない。大抵、高山のくだらない冗談や彼の無茶な武勇伝に、真部が振り回されるという流れに尽きる。しかしそこにこそ、本書の示すものがある。結局のところ、お堅いビジネス書から得られる知識など知れている。営業マンたるもの、こんなご時世であれど街へ繰り出し、そこに溢れる人やモノ、そのほか「森羅万象」に学びを深めてゆくべきなのだ。――矛盾に満ちたタイトルに込められた思いを噛み締めたなら、やるべきことはただひとつ。この本はゴミ箱にでも放って、いざ街へと繰り出すこととしよう。　（**八雲**）

（248頁　税込1540円）

新刊コーナー

一汁一菜でよいという提案

土井善晴著
新潮文庫

一汁一菜とは、単に献立を指しているのではない。歯を磨いたりお風呂に入ったりするのと同じように、一汁一菜を作り続けなさいと土井先生は言う。美味しさや美しさはさほど重要ではない。日々淡々と無理なく生活していくこと。一汁一菜とは、食事とは、暮らしのリズムを作る柱なのだ。

現代では「料理」というと、見栄えもよく手の込んだものが良いと思われがちだ。土井先生はそこに疑問を投げかける。日本には「ハレ」と「ケ」の概念がある。神様のための「ハレ」のお料理は、手間をかけて美しく作るが、「ケ」は手をかけない簡素なものが良いとされる。この「けじめ」が、和食に宿る生活の美学なのである。

〈繕わない味噌汁〉と題されて、土井先生が普段食べている数々の味噌汁の写真が載せられている。そこに写っているのは、溢れんばかりの生活感だ。きゅうりとハムの味噌汁に、煮干しが椀からはみ出した味噌汁。冷蔵庫にあるものを詰めたのか、作りすぎて溢れそうになったのかもしれない。「人の暮らしとはそういうもの」と土井先生は書いている。

一汁一菜は応用が効く。味噌汁とパンでも良いし、おかずが増えて三菜になっても良い。大事なのは、「一汁一菜」という軸が自分の生活の中にあることだ。それは、「一日、一日、必ず自分がコントロールしているところに帰ってくる」ための心の置き場になる。無理をせず毎日の食事をきちんとすること。一生懸命生きるとはそういうことなのだ。（芫漠）

（一九二頁　税込九三五円　11月刊）

アスリープ

森泉岳土著・イラスト
青土社

《出口の見えない
繰返しの毎日の中
昨日と今日の区別が
つかなくなり
過去と現在が混濁する
そして未来だけがない》

人が時間を喪ってしまう時は、いつなのだろう。過去という日々が朧気になって、今ということを感じられなくなって、明日が来ることを信じられない日は。大泉岳土の『ASLEEP』は、そんな《時の制約》から解放された人間の姿を映し出してくれる。むろん常世ではない、かといってそこに現世はない。

かつて首都だった都市に取り残された一人の女性、チタル。流れ着いた街の高層ビルには、友人たちの死が漂っている。あのビルにはタクマが、あのビルにはマリが……墓石のようにそびえたつビルの合間を一人生き残ったチタルは彷徨っていく。かつて愛したシスカも三年前に死んだ。どんな困難も乗り越えられると信じていたのに、それが無邪気で愚かだったということをチタルは知った。希望を持つことのないチタルは、明けない夜を過ごすように、闇へ闇へと向かっていく。

漫画で描かれるチタルの表情、背景に映る街並み、ともに無表情だ。この物語に色はない。灰色の世界を、生気を失った人間が徘徊する。霞んだ風景も、歪曲した線も、チタルの心象を描いているように思える。

そして終盤、チタルは壊れかけのロボットと出会う。その時、喪われていた時が動き出す。死と眠りの狭間の中で、未来という朝を迎えようとする。人は希望を夢見た時、時間を必要としたのかもしれない……。（きもの）

（五三頁　税込一九八〇円　7月刊）

遺書、公開(8)

陽東太朗著
スクウェア・エニックス

歪なスクールカースト。平等なはずの人間に付けられた確かな序列。学校で感じる苦しみにはいつも、人間関係という鎖がまとわりついていた。義務教育を経験してきた者ならば、教室という空間で起こる「政治的」な世界を、身をもって知っていることだろう。

『遺書、公開。』は、スクールカーストを徹底的に描いた漫画だ。ある日、クラス全員の机に置かれた遺書。それは数日前に謎の自死を遂げたクラスメイト・姫山椿からのものだった。そして、死の真相に迫るために、一人一人が教卓の前に立ち、自分宛の遺書を、全員の前で読み上げていくのであった。

あらすじだけを聞くと、姫山がクラスの中で可哀想な立場に立たされていた人間であるように思われるが、実は姫山は、「一位の人」という称号を付けられた、才色兼備の人気者であったのだ。だからこそ、彼女が自死を選ぶ理由は誰にもわからなかった。しかし、クラスメイトが次々と遺書を公開する中で、教室の中に張り巡らされた恐ろしい人間関係が浮かび上がっていく。これは、一人一人の在り方が、逃れようもなく問いただされていくような、スリリングな群像劇なのだ。

この漫画を読む度に、冷たい義務教育の時代を思い出す。あの時の友達は、本当に自分のことを友達だと思ってくれていたのだろうか。自分が存在する場所を選ぶことが難しかったからこそ、その疑念をいまだに拭うことができないのだ。思惑に塗れた大人より大人な「教室」という世界。そこから抜け出した今だからこそ、その深淵をもう一度覗いてみてはいかがだろうか。　（ましゅ）

（一八四頁　税込六六〇円　8月刊）

骸骨

ジェローム・K・ジェローム著
中野善夫訳　国書刊行会

知る人ぞ知る『ボートの三人男』の作者として、ジェローム・K・ジェロームのことは形容できるだろう。近代英国の貧しきユーモア作家は、しかし他方で、人間心理を熟知した怪奇小説の名手でもあった。

本邦における本格的なジェローム紹介が今日まで為されなかったことは、実に嘆かわしい。思わずそう呟いてしまうのは、このでっぷりと魅力を蓄えた小説集を読んだせいである。表題作「骸骨」をはじめ多くの作品は、幽霊や死者の屍といった不気味なモチーフに彩られている。ただしそれらが放つ怪しげな魅力は、ただ作劇の道具となるのではない。むしろ人生に対するしみじみとした省察を、異形たちは促してくる。非現実的な創造の産物が、現実感覚を刺激するという逆説に、きっと読者は可笑しみを覚えるであろう。

珠玉の短篇たちの中から、「ディック・ダンカーマンの猫」を取り上げてみたい。語り手「私」の友人ダンカーマンは、突如有名になった脚本家である。恋煩いの相談で彼を訪ねた「私」に、ダンカーマンは飼い猫ピラミッズとの対話を勧める。曰く、その美しい猫は、飼い主の状況を瞬く間に好転させるらしい。その後語り手は別の友人たちの家でもピラミッズと出会う。そして、自分の下にも猫が来ないかなと、心の隅で思うのである。

幽霊物語（ゴースト・ストーリー）が語られるクリスマス・イヴを描いた「食後の夜話」も極上である。今年の聖夜は本書を片手に英国紅茶でも飲みながら、心身の暖をとって過ごしたい。　（とよ）

（四八〇頁　税込四一八〇円　7月刊）

優しい語り手
ノーベル文学賞記念講演
オルガ・トカルチュク著
小椋彩・久山宏一訳　岩波書店

「文学はいつでも時代の鏡であるが、このことには二つの意味が含まれている。」それは、文学が時代精神の反映でありながら、時代や人間を描出する術でもあるということ。矢内原伊作は戦後の文学状況をこう論及した。それでは、現代文学はどんな鏡たりうるのか。

本書は現代ポーランド文学を代表する作家トカルチュクの講演集である。表題作「優しい語り手」はノーベル文学賞記念講演で披露されたもので、現代という時代を分析しながら、文学の現状や在り方を深く問うている。

現代文学は、急速な文学市場の商業化により、文学の過度なジャンル分け、シリーズ作品の量産、玉虫色の結末の多用、フィクション作品の不人気へ至った。他方現実世界は、真偽不明の情報が巷に溢れ、活字の助けなしに直接伝達され始めた。文学を巡るこうした状況を著者は、「物語の危機」と感じている。この危機に立ち向かおうと、彼女は物語の新しい方法を提示する。人間だけでなく、生きものや事物全てに人格／声を与え、彼らに共感し耳を澄ませる技術、「優しい語り」だ。この語りは、命ある全体として世界を描き出す。同時に私たちは、世界の一つのかけらとして「文学」で繋がるのだ。想像力の欠如や人間本位の損得勘定に抗い、時空をも超えて。

著者が提示する問題や提案は、ポーランドや「中欧」に限定されない。むしろ「文学」の未来に繋がる、大きく開かれたものである。本書を手に、自問してみて欲しい。文学という鏡は私たちに何を映し出すのか、そして私たちはその鏡に何を映すのかと。（リンダ）

（二二四頁　税込一九八〇円　9月刊）

家庭性の時代
セアラ・ヘイルとアンテベラム期アメリカの女性小説
増田久美子著　小鳥遊書房

男は仕事、女は家庭と表現される「男女の領域分離」は、その非対称性ゆえの瑕疵を無数に抱えている。数多の批判がなされたこの問題に対し、近年では内在的な抵抗の試みがあり得たとして、再検討が行われている。

南北戦争前夜期（アンテベラム）アメリカの作家、編集者であった女性セアラ・ヘイルのテクストを解読する本書も、その一環と言える。当時の女性文化に多大なる影響を与えたヘイルは、従来「女性性」を家庭と結び付ける保守的イデオロギーの提唱者とみなされてきた。しかし著者の増田は、ここ半世紀の女性史研究や作家論を踏まえ、既存の理解を棄却する。その上で明かされるのは、家庭を女性の公的活動の足掛かりとする真逆のヘイル像である。

理路整然とした分析の中で、ヘイル文学のもつ逆説性が重要な論点となる。啓蒙思想やヴィクトリアニズムなど、領域分離を強化する社会通念は、確かに彼女の物語から読み取れる。しかし、同時にヘイルは、領域分離が含みもつ様々な矛盾をも曝け出す。「権利なき市民」であるはずの女性による慈善活動や女性講演家の正当性、家庭の領域を侵犯する男性の存在など、彼女は多様な問題圏を書き起こしていた。本書では、ヘイルの試みが受容面で果たした役割にも目が向けられ、解釈を支える共同体の姿が静かに伝わってくる。

意に満たぬ現状の中で変革の途を諦めなかったヘイル。彼女の戦略、そしてそれを導き出した著者の解釈は、家庭の内外を問わぬ連帯の可能性を示唆するものだろう。（とよ）

（二八〇頁　税込三〇八〇円　7月刊）

三余続録

吉川忠夫著
法蔵館

本書を一言でいえば「中国古典エッセイ」だ。タイトルが「三余続録」というのは、文字通り、本書が著者の旧著『三余録』の続編だからである。しかし続編の本書から読み始めても充分に楽しめるので、最後まで書評にお付き合いいただきたい。

中国古典と聞くと、どこか自分の人生とは縁遠い存在に感じるかもしれない。しかし本書を読めば、中国古典を身近に感じられるだろう。たとえば《「七十二」という数字》というエッセイが収められているが、この作品は、『論語』や『孟子』に関心がなくても、思わず「へえ」と頷いてしまうような蘊蓄が紹介されていて面白い。他にも《思いこみは恐ろしい》も肩肘張らずに読めるエッセイだ。語り口が軽快であることはもちろん、その内容も興味深いものであるがゆえに、気づけば次のエッセイも読みたくなっている……そんな一冊だ。

とはいえこのような声もあるだろう。則ち、わざわざ中国古典の話なんて読みたくない、というものだ。確かにそう思うのも無理もない。まずもってタイトルからして意味不明。なんの本か分からない——その批判は受け入れよう。しかし、ひとたび頁を開いてみれば、これまで知らなかった世界が広がっているのだ。月並みな表現だが、それが評者が本書を勧める所以である。

「七十二」という数字について言及したが、ちなみに本書にはズバリ七十二のエッセイが収められている。その理由を確かめるだけでも、充分本書を読む理由になろう。（出席点）

（二五六頁　税込二五三〇円　9月刊）

小林秀雄 美しい花

若松英輔著
文春文庫

「小林秀雄論は文字通り無数にある。しかし、その言葉の先に小林の姿が浮かび上がるものはけっして多くない」——著者はあとがきでこう語る。では果たして、小林秀雄をめぐるこの浩瀚な評伝を通じて、小林の姿は浮かび上がっているのだろうか。

本書は、小林秀雄のなかで批評家としての精神が醸成されていく過程を丹念に追ったもの。学生時代の小林から始まって、彼が以後、どのような人と出会い、どのような本から影響を受けたのかが、生き生きと描かれる。とりわけその記述を面白くしているのは、小林を取り巻く人間関係のドラマである。志賀直哉や柳宗悦といった白樺派、中原中也や富永太郎といった友人、そして中野重治や中村光夫といった批評家。彼らと小林の人間模様を描き切るその見事なまでの筆致には、思わず惹き込まれてしまう。もちろん、ランボーやボードレール、ヴァレリーなどから小林が受けた影響も、余すところなく記述されている。

著者は言う。小林にとっての批評とは「読み、書くことによって論じる相手の生涯を生き直してみようとすることだった」と。批評とはつまり「論じる相手の心の内側に入り、その眼を通じて見た世界を描き出そうとする」営みなのである。だとすれば、こうも言えるだろう。批評家・小林秀雄の批評である本書を通じて、著者は小林の生涯を生き直し、その眼を通じて見た世界を描き出している、と。そしてそれゆえ、冒頭の問いに戻れば、そこには小林の姿がありありと浮かび上がっているのである。

（ばや）

（五九二頁　税込一二六五円　6月刊）

教育福祉の社会学
〈包摂と排除〉を超えるメタ理論
倉石一郎著
明石書店

教育福祉とは何だろうか。著者である本学人間・環境学研究科教授倉石一郎は、大きな教育理論ではなく個別に実践されてきたいわばイレギュラーな教師と生徒の関係に着目する。現実を理論に近づけるのではなく、理論を現実に近づけた新たな教育福祉のあり方を提示するのである。

教育を考える際に包摂または排除という二分法的な考えが、人々に無自覚につきまとっている。著者は、包摂を真ん中に据え、どちらかにしか属せないといった「同心円モデル」を棄却する。その上で、包摂の中の排除、排除の中の包摂といった入り組んだ事例を示す。絶対に全ての子どもを学校に通わせるという強力な包摂は、時に排除をより不可視化させ、強固なものにする。障害をもち、教育免除を受ける子どもたちは温情ではなくむしろ教育を受けさせる義務という範疇から排除されている。現存の理論的枠組みを越える新たな理論の構築を本書は目指す。

著者のこうした視点から構築される理論には、まず具体的な教育現場が描かれている。排除を受ける者の声を著者は拾い、時に研究者という自身の立場の意義に悩まされる。メタ理論構築を試みる著者は、生々しささえある苦しむ人々と自己の像をみる。排除された者たちにしか分かり合えないことに対して、私たちは介入する権利を持つのか。そんな戸惑いに本書は向き合い、答えてくれる。ルーマンやマーシャルを引用した社会理論など少々骨の折れる難しい話もでてくるが、ぜひ挑戦してほしい一冊だ。（トントゥ）

（二一二頁　税込二五三〇円　6月刊）

「論理的思考」の社会的構築
渡邉雅子著
岩波書店

我々は少なくとも論文を書いたり読んだりする必要に日々迫られている。その際に、どのような論文の型があるのか、ということを知っている必要があるわけだが、我々の目にするものには大きく隔たりがあるのだ。たとえば日本の小論文、アメリカのエッセイ、フランスのディセルタシオンはそれぞれ形式が異なる。そこには何をもって「論理的」とするか、について国ごとに考え方が異なるという背景がある。本書では、アメリカや日本と異なるフランスの論理的思考の培われ方に関して紹介がなされている。

具体的に何が異なるのかというと、アメリカや日本では基本的に自分の主張を述べ、それを補強するような具体例・他者の見解を提示してまとめる。それにより自らの主張に妥当性があることを訴えるのである。これに対しフランスでは、いわゆる弁証法的に論を構成しなければならない。つまり、ある主張とそれに矛盾する主張を提示し、その矛盾を解消し得るような展開を引き出して論をまとめなければならないのだ。この型に則って論を構成していく中で、自らの見解と対立する主張を認め、それを超克する見解に達することが求められる。さらに、自分の個人的見解を書くのではなく、著名な書物からの引用を挿んで、論の抽象性・蓋然性を高めていく。

このような論文構成を求められるようになったフランスの公教育の方針とその歴史についても本書は詳しく説明してくれる。

論文が形無しにならぬ様、まずは型を知ってみてはどうだろう。（ねこ）

（二七四頁　税込四六二〇円　7月刊）

アルバイトの誕生
学生と労働の社会史
岩田弘三著　平凡社新書

「労働」を意味するドイツ語〈Arbeit〉。この言葉が日本語「アルバイト」へと展開する過程に、戦後日本の急激な変化が反映されていることを、貴方はご存じだろうか。

戦前には内職と呼ばれ、少数の苦学生が従事していたアルバイトは、敗戦後の苦境により多数のエリートの「自活の途」となる。売血などの危険な業種も含め、学生たちは「学費・生活費のためのアルバイト」を余儀なくされた。しかし一〇年もすると、高度経済成長の到来とともに、「小遣い稼ぎのためのアルバイト」が主流となっていった。この二転三転する「アルバイト」の内実を、著者は統計資料や具体的な証言を駆使して追跡する。

学生の就労に依存したり、雇用者を使い潰す形態をとるアルバイトは未だに多い。しかしそれもここ半世紀のうちに生み出された環境である。社会の流れと共にあるアルバイトの不安定さが、本書では簡潔に示されている。

なお、ドイツ語〈Arbeit〉の語源は「下僕」である。青春を彩る主従関係を再認識するためにも、同書の知見は有効だろう。（よ）

（二一三頁　税込九二四円　10月刊）

従順さのどこがいけないのか
将基面貴巳著　ちくまプリマー新書

一説によれば、日本の教育は学生の「批判的思考」を育てることに失敗しているらしい。教師自身に批判力がなく、素直であることや協調的であることばかりを促してしまう。そうした空気は理不尽な校則が放置され、社会の不正に沈黙する姿勢を育てている。

では改めて「従順さのどこがいけないのか」。本書は古今東西の作品を参照しながら、従順さの負の側面に光を当てていく。無責任でありたい欲望、「しかたがない」という諦め、自分自身は「不正を犯していないから」と見て見ぬふりをする態度。同調圧力に流され「みんなでやれば怖くない」という態度にこそ、本当の恐怖が宿っている。

読んでいて思うのは、怒りや暴力を、異様に忌避してしまう人々の態度だ。アンガーマネージメントは全ての怒りを抑制するものではなく、暴力は常に悪ではない。しかし人は声を上げることを含め、不正に対する抵抗を抑圧してしまう。今私たちは理不尽に耐える力ではなく、理不尽を変える力を育てるべきではないか。（き）

（二一四頁　税込九二四円　9月刊）

京都　近現代建築ものがたり
倉方俊輔著　平凡社新書

京都といえば歴史ある寺社に格子窓や犬矢来を備えた町家、木の作りの建物が素晴らしいと思われがちだ。しかし、最近少しずつ石やコンクリートなど近代的造りのモダン建築に関心が向けられている。明治になり西洋建築の知識が入ってくるとそれを受容した建築家たちが京都に新しく建物を作り上げてきた。逸話を交えてそれらの建物を紹介してくれるのが本書である。

「建築」の訳語を作った伊東忠太、京大の建築学科を創立した武田五一、彼らは西洋建築の知識を取り入れながら、それを東洋・日本へといかに融合させようかということを試行していた。やがて鉄骨やコンクリートなど新たな建築方法が生み出されると、それを和と折衷させる建物が作られた、この京都で。京都タワー、京都駅、今は立ち入れない高瀬川沿いのＴＩＭＥ′Ｓ。歴史のある京都だからこそ旧いものと新しいものが並んだ複層的な景色が可能なのかもしれない。街並みに不思議な形で溶け込む建物たちを本書片手に訪れてみるのもいいだろう。（ね）

（二一三頁　税込九四六円　9月刊）

弔いとしての出版――編集工房ノアという出版社

編集工房ノアという出版社がある。一九七五年に大阪で創業され、以来、関西の文芸専門出版社として、関西在住の詩人や作家たちの本を数多くこの世に送り出してきた。この出版社がなければ埋もれたままだった書き手も多いはずだ。そんな類稀な出版社である編集工房ノアの本を読んでいると、つねづね思うことがある。それは、出版とは弔いであるということである。今は亡き人の本を出すこと、あるいは今は亡き人について書かれた本を出すこと、そうすることで私たちは、死者をいたわることができる。編集工房ノアが行なっていること、それはまさに弔いとしての出版ではないだろうか――。

死者を近づける文章

編集工房ノアの社主である涸沢純平は、自社から対となる二冊の本を出している。『**遅れ時計の詩人**』と『**やちまたの人**』がそれだ。「編集工房ノア著者追悼記」と副題にあるように、涸沢はここで、編集工房ノアゆかりの今は亡き詩人や作家たちとの思い出を回想している。登場するのは、港野喜代子、清水正一、足立巻一、大谷晃一、天野忠、富士正晴、杉山平一など、あまり聞き馴染みのない書き手たち。しかしだからといって、本書への興味を失ってしまうのはあまりにもったいない。

本書を読むと、まず書き手の人柄にぐっと惹かれる。それは本書が、作品の内容というよりも、その書き手がどのような人物であり、どのような人生を歩んだのかをありありと伝えているからだろう。とくに印象的なのは港野喜代子をめぐる回想。「大阪のおばちゃん」のように、まっすぐでからっとした性格の港野はよく、自宅の庭で野の花を摘んでは、それを壇上のビンに飾り、お得意の即興詩を朗読していた。しかし彼女は、二〇年振りの第三詩集を編集工房ノアから出版してすぐに、心臓マヒで死んでしまう。その港野の葬儀で、詩人の永瀬清子は弔詞として詩を詠んだ。そのなかの一節――「まれな人、詩によってのみ生きた女性（ひと）。いま／やすらかに眠り、その魂が時来ては咲きつぐ野花のように人々の間でかおることを祈るのみ」。港野の魂は、本書を通じてしっかりとかおっている。

死者を立たせる文章

編集工房ノアを代表する作家の一人に、左京区在住の山田稔がいる。御年九一歳。山田はこれまで、その妙味あふれる随筆を通じて、関西とりわけ京都周辺の今は亡き人びととの思い出を回想してきた。『**天野さんの傘**』もそのうちの一つだ。ここに登場するのは、生島遼一、伊吹武彦、天野忠、松尾尊兊、富士正晴といった、これまたあまり聞き馴染みのない書き手たち。しかし、本書を読み終えたとき、私たちは不思議と彼らに親しみを覚えているはずだ。

なかでも印象深いのは、富士正晴をめぐる文章。富士は生涯をかけて死者をよみがえらせようとした。つまり、そのままでは忘れ去られるであろう師や友が書き残したものをまとめ、刊行しようとつとめた。そんな富士が好んだ言葉がある。「物在人亡」がそれである。人が死んでも、物はそこに在り続ける。そして書き残されたものから、死者はいつでも立ちのぼる。山田が本書で行なっているのも、そうしたことだろう。富士だけでなく山田もまた、死者を弔い、彼らをよみがえらせようとしているのである。「みな早々と舞台を去った。ひとり残された私が、記憶の底を掘返している」。（**ばや**）

大森荘蔵――生誕百周年を（勝手に）祝う

もしも「いちばん尊敬する哲学者は？」と尋ねられたなら、私は迷うことなく「大森荘蔵」と答えよう。哲学を専門としない多くの方に、その名は初耳かも知れない。しかし他の哲学者の考えに縋り付くことなく自分の頭で考え抜くスタイル、そして彼の門下生たちがのちに大きな活躍を収めていったことを思えば、その偉大さに敬意を評し、私はその名を挙げずにいられない。さて、本年は彼の生誕百年を数えるアニバーサリーイヤーでもある。ここでは特に、彼の哲学への入門的著作と、本格的議論の一例となる著作を紹介し、私からの（勝手な）祝いの言葉に代えさせていただきたい。

大森哲学への入門：『流れとよどみ』より

まずは『流れとよどみ』を取り上げてみよう。この著作の大部分は一般雑誌に連載されたものであり、大森哲学に入門するには、これを繙くのが最適だろう。章によって議論の内容はさまざまだが、ここでは特に、いわゆる他我問題に関する議論を挙げておこう。

たとえば「万事人並みに振る舞うロボット」に心や意識はあるのか、を考えてみよう。それらが意識ある「振りをしている」だけなのか否かは（それらに直接尋ねることが可能だったとしても）結局のところ、答えの決め手とならない。事態がさらに深刻なことには、このことは他者一般にも当てはまる。私たちの友人や親兄弟が意識ある「振り」をしているのでなく、実際に意識をもった存在であることを、私たちはどのようにして根拠付けられるだろう――このようにして、かの有名な哲学的難問「他我問題」がその姿を現わす。

ここで大森は、このような困惑を「人間の理解の基となるべき「事実」」として捉え返すよう提案する。どれだけ想像を豊かにしても、私たちは他者の意識そのものには到達できない。しかし目の前でお腹を押さえて苦しむ友人の立場に、私が置かれたならと想像し、その痛みを理解する。このような成り変わりはやがて、彼らとの「人間仲間」としての結びつきを私に与えることとなる。

大森哲学の真骨頂：『新視覚新論』より

つづいて紹介したいのは、大森の代表作のひとつであり、本年よううやく文庫化された『新視覚新論』である。巻末解説にもある通り「通読にはいささか手強い「難物」」とも言える著作だが、ここでは、言語の意味に関する「立ち現われ」の議論を取り上げたい。

私たちは日常的に過去の経験を語り、他者の語る過去を了解する。しかし、今まさにここにない過去の出来事というものを、私たちは一体どのように理解するのだろう。大森によれば、このような語りの了解は、なにも過去のコピーの再体験などではない。曰くそれは、語り手に過去の体験そのものが「じかに立ち現われる」ことにほかならず、一方の聞き手にもその同じ出来事が「言い現わされる」ことである。たとえば、私が昨日喫茶店でひとりコーヒーを飲んだ経験を友人に語るとしよう。もちろんそのような想起は、昨日のコーヒーをまた飲み直すようなことではない。自ら語ることで私には、そのコーヒーを飲んだ経験がじかに立ち現われ、一方友人にはまるで「呪文」のように、このコーヒーが「言い現わされる」。

この、物事が「じかに立ち現われる」という発想は、大森哲学のひとつのキーワードでもある。世界のすべてが「立ち現われ」に尽きるとする「立ち現われ一元論」で大森は、実在物が心の中の表象にすぎないとする二元論的構図の打開を試みたのであった。（八雲）

編集後記

私は、小学校の読書タイムでこっそり漫画を読んでいたこともあるくらい、漫画が大好きでした。そこから読むだけではあきたらず、自分で漫画をつくるようになりました。学年中の女の子たちに、「早く続きを書いて！」とせかされるようになり、私は人気漫画家きぶんで、得意げになっていました。

つぎは家族に喜んでもらおうと思い立った私は、描いた漫画をみせました。すると、家族はみんな笑いました。きっと、大人にとっては、「小さい子供がいっちょ前に物語を書いとう。」と微笑ましく思ったのでしょう。しかし、私はかんかんでした。ただ、私の漫画を正当に評価してほしかったのです。笑い話を書いたわけではないのに、一生懸命にやったのに、大人たちは私を対等に扱ってくれはしませんでした。

唯一、図工の内野先生だけは、私の創作に的確なアドバイスをしてくれました。先生は、私たち子どもの果てしない想像力を尊敬し、じっと見守ってくれていました。そんな先生のおかげで、私は大人を嫌いにならずに済みました。寒くなって、ふとそんなことを思い出しました。（トントゥ）

当てよう！図書カード

今号の特集では、大森荘蔵の著作『新視覚新論』を取り上げました。このタイトルが哲学における古典『視覚新論』に因むことは、言うまでもないことですが、ここで問題です。この『視覚新論』を著した、イギリス経験論の哲学者は次の四人のうち誰でしょうか？

1. ベーコン　2. ロック
3. バークリー　4. ヒューム

（八雲）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）から応募することも可能です。正解者の中から 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは 1 月 15 日です。

《8・9 月号の解答》 8・9 月号の問題「『綴葉』創刊号の表紙のイラストは？」の正解は、「2. 鶴と太陽」でした。400 号を読んでくださった皆さま、ありがとうございました。今後も『綴葉』をよろしくお願いします！

図書カードの当選者は、鶴と亀さん、はーさん、すずめさん、宵さんです。おめでとうございます！（出席点）

読者からひとこと

○毎回楽しみにしています。編集後記も、知っている思想家についての話で、興味が湧き、楽しく読むことができました。（法・大三元）
――ありがとうございます！ 編集後記は各編集委員が持ち回りで担当しております。書評本編とはまた違った「後記」を書いておりますので、ぜひ最後のページまでお楽しみいただければと思います！

○ウェブサイトから初めて投稿してみました。こちらの方が楽でいいですね。（工・Soso）
――便利に感じていただけたとのこと、嬉しいです。紙で書くのが面倒という方は、ぜひウェブサイトから投稿してみてください！ ちなみに『綴葉』自体も生協のホームページからオンラインで読むことができますよ！

○特別企画も面白く拝読いたしました。ここ一年以上、本屋を無闇にうろうろしてタイトルを見て検討する、みたいな本の選び方が出来ないのが寂しい限りです。皆様のおすすめで本と出会えるのが幸福です。（理・はー）
――ありがとうございます！ あなたにとって素敵な本との出会いがあればと思い、日々書評をさせていただいております。今後とも『綴葉』をよろしくお願いします！（出席点）